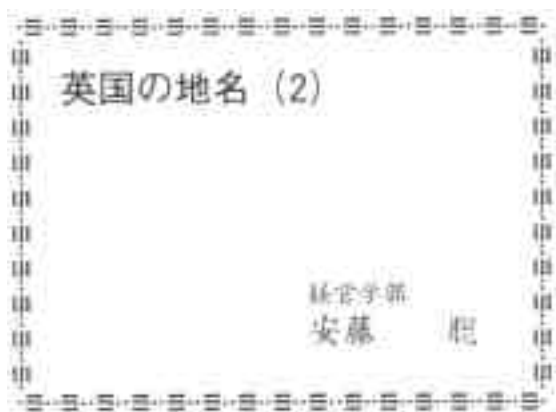


層深くなるのであった。

EUによる通貨統合はドイツに対する外圧的戦後処理ともいわれている。確かに通貨統合後、マルクは弱体化した。しかし物価は安定し、少なくともゲッチングでは変らない生活が人々を取り巻いている。過去への嘆きよりも、「ドイツはこれから何をするのだろう」と、次の世紀への期待も心をよぎるようなドイツの底力を感じるの、私が日本人だからであろうか。



今回はイングランドの地名を中心に紹介したので、今回はスコットランドとウェイルズ編をお送りしよう。スコットランド語（ゲール語の一種）は現在では特にハイランド地方の一部と孤島にわずかに生き残っている程度であるが、地名の中にはいくらかでもその痕跡を辿ることができる。ウェイルズでは道路標識が二カ国語（英語とウェイルズ語）であり、イングランドとの国境には'Welcome to Wales / Croeso i Gymru' と併記された看板が必ずある。母国語としてのウェイルズ語話者も北部を中心に少なからず存在し、中には英語を全く解さない者もいて、我々日本人にとっては信じがたいことだが「英語をまったく話せない英国人」というのも確かに存在するのだ。アングロ・サクソン人の国であるイングランドに対してスコットランドとウェイルズ、そして隣の島アイルランドはケルト人の国であり、それぞれにイングランドとはまったく異なった文化を持つ。

小学校時代音楽の時間に「ロッホ・ローモンド」というスコットランド民謡を習った記憶がある人

も多かる。この歌はイングランドで投獄されたスコットランド人兵士が処刑される前夜に故郷の湖を思って書いたものと言われている。湖の名前は「ロウモンド」で、「ロッホ」は「湖」を意味するスコットランド語である。従って有名な「ネス湖」は現地では「ロッホ・ネス」と呼ばれる。「ロッホ」は'loch'と綴り、「ホ」は英語にはない子音であるため（発音記号では'x'で表される）、イングランド人やアメリカ人などは通常「ロック」と発音する。スコットランドは湖が多い国なので、この単語はロッホインヴァー、ロッホナガー、ピトロッホリーなど多くの地名に見られる。

ロッホインヴァーの「インヴァー」は「河口」を意味するスコットランド語である。イングランドで言うポーツマス、プリマスの「マス」である。但しインヴァーの場合は語頭に来ることが多く、ネス川の河口の街はインヴァーネス、エスク川の河口にはインヴァーレスクがある。アバディーンの「アバ」もまた河口を意味し、この街は実際ディー川が北海に注ぐ河口に位置しているが、実際地名の語源となったのはこの川ではなく近くを流れるドン川である。何故なら旧市街である「オウルド・アバディーン」はドン川の河口に近いところにある。グレンフィナン、グレンリー、グレンコウなどの「グレン」は「渓谷」を意味し、この 'glen' は 'loch' とともにスコットランド方言として英語の中に生き残っている。「グレン」よりも広い「渓谷」を意味する「ストラス」(strath)も方言として生き残っているばかりでなくストラスヘイヴン、ストラスクライドなど多くの地名を形成している。

ベン・モア、ベン・ネヴィスなどの「ベン」は「山」「頂上」を意味する。ベン・ネヴィスはスコットランドで一番高い山であり、ブリテン島全体でもこれが最大の標高を誇ることになっているが、それでもわずか1344mだ。一方「ダン」は「要塞」を表し、ダンディーは「デイグ（人名）の砦」、ダンバーは「丘の上の砦」、ダンケルドは「カレドニア人の要塞」を意味する。カレドニアは言うまでもなくスコットランドの古名である。「教会」を表わす英語 'church' はスコットランド方言では

'kirk'であり、カーウォール、カータカドブライト、セルカークなどはすべて、教会にちなんでつけられた地名である。カークビー、カークリーズなど、「カーク」がつく地名はイングランド北部にもよくある。

「ウェイルズ」は「外国人」を意味する古英語を語源とし、勿論アングロ・サクソン人が付けた名前である。ウェイルズにも英語とは明らかに違った音や綴りを含む独特の地名が多く、スコットランドのそれよりも難解である。カナークヴォン、カーフィリー、カイアゴアリーなどの「カー」「カイア」(caer)はスコットランドの「ダン」と同様「要塞」を意味する。カナークヴォンは「アーフォン(アングルジー島)に面した砦」の意であり、英国皇太子「プリンス・オヴ・ウェイルズ」の戴冠式はここで行なわれる。ウェイルズの首都カーディフは英語では'Cardiff'だがウェイルズ語では'Caerdydd'と綴り、意味は「タフ川に面した要塞」である。

ブレインセッハイ、ブレイン・ア・クーム、ブレイン・サンヴィなどの「ブレイン」(blaen)は水源もしくは高地を表し、ブレイナヴォンは「川の源流」である。ウェイルズ語で「川」は'avon'であり、イングランドにあるエイヴォンという川もウェイルズ語に由来する。一方ブリンマウア、ブリンパデュー、ブリンハヴリッドなどの「ブリン」(bryn)は「丘」を意味する。「クーム」(cwm)はクーム・アヴォン、クームグラッホ、クームディなどの例に見られるが、これはスコットランドの「グレン」と同様「渓谷」を意味する。「クーム」の場合特に「狭い渓谷」であり、イングランド南西部にもババクーム、イルファクーム、カースル・クームなどこれがつく地名は多いが、英語では'combe'と綴る。

スコットランドのアバディーンと同様、「河口」を意味する「アバー」がつく地名はウェイルズにも多い。「イストゥイス川の河口」にある海辺の観光地アバリストゥイス、「ダヴィ川河口」のアバーダヴィ、イングランドのボーツマスと同様「河口の港」の名を持つ漁村アバーホースなどがそれ

である。英語で「ピン」とか「ペン」で始まる単語は「先が尖ったもの」を表すことが多いが、地名で「ペン」がつくのはたいてい半島の先端にある町や村である。港町ペンブルクは文字通り「土地の先端」にあり、ペンマインマウアは「巨大な岩の先端」から来ている。イングランドの西南端コーンウォール(この「ウォール」は元来「ウェイルズ」と同じ語である。「コーン」は「ツノの先端」であり、つまり「コーンウォール」は「(半島の)先端の外国人の土地」の意である)の半島にある街は「聖なる岬」ペンザンスだ。「ザンス」は英語の「セイント」に相当する。コーンウォールは現在ではイングランドの一部であるが、元々はウェイルズと同様ケルト人の国である。ここには半島がいくつもあるので、「ペン」で始まる地名も非常に多い。

さて、最もウェイルズ語らしいものといえば、やはり「教会」を表わす「サン」がつく地名であろう。これは'llan'と綴り、'll'は英語の子音'l'を無声音(摩擦音?)にしたような音である。筆者は音声学の専門家ではないので、この説明は必ずしも科学的に正確な説明とは言えない。英語音声学の専門家で釣りが趣味である故にウェイルズを頻繁に訪れている友人は、むしろ「シャン」と表記した方が近いかも知れないと言う。この'll'の子音も勿論英語には存在しないので、非ウェイルズ語話者は「スラン」[slan]という発音で代用する。これがつく地名にはサンベリス、サンゴセン、サンダドゥノウ(シャンベリス、シャンゴシェン、シャンダドゥノウ)などがある。サンベリスは6世紀にローマから来た伝道師セント・ペリスにちなむと言われ、サンゴセンは7世紀にローマ軍の軍人として渡ってきたセント・コルン、サンダドゥノウはおそらく6世紀頃この地で活躍したセント・タドノウに由来する。しかし何と云っても、ウェイルズの「サン」で始まる地名の中で最も有名なものと言えば、メナイ橋を渡ってアングルシー島に入って西に折れて10マイルほどのところにあるサンヴァイアブスグウィングスゴウゲラッホワンドロウブスサンダシリオウゴウゴウッホ

(Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwllllan-dysiliogogogoch)という58文字の長い名前を持つ村であろう。ここには鉄道の駅があり、英国の寒村の駅の例に漏れず無人駅であるが、駅近くのスーパーで土産物として長い長い入場券を売っている。この名前は二つの村が合併したときにいずれの名前を取るかでどちらも譲らず、結局両方の村名を強引につなげてしまったという経緯がある。合併する前から十分に長かったという気がしないでもないが、前半の「サンヴァイアプスグウィンギスゴウゲラッホワンドロウブス」の部分が「渦巻く急流の近くの白いハシバミの池の近くの聖マリア教会」、後半「サンダシリオウゴウゴウゴウッホ」が「洞窟の近くの聖ティシリオ教会」を意味する。しかしこれだけ長い名前だと当然日常生活に支障を来たすので、通常は'Llanfair PG'と表記し、「サンヴァイア・ピー・ジー」(非ウェイルズ語話者は「スランフェア・ピー・ジー」)と発音することになっている。

ところで今回の『語研ニュース』はアメリカ特集である。ついでに米国で一番長い地名についても触れておこう。それはマサチューセッツ州ウェブスター近くのチャーゴウガゴグマンチョーガゴグチョーブナグンガモーグ(Chargoggagoggman-

chaugagogggchaubunagungamaugg)という44文字からなる湖の名前であり、原義はインディアン語で「君は向こう側で魚を釣れ。僕はこちら側で魚を釣る。真ん中の魚は誰のものでもない。」ということらしい。



名古屋語学教育研究室のホームページを開設しました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/>

**’00 公開講座「言語」のご案内**

愛知大学言語学研究会

(後期)

愛知大学東田校舎3号館3階332講義室  
午後2時半～4時半

2001年  
10月20日(土) (2講義開講)

「空間のことば」  
片岡雅好 (愛知大学法学部助教授)

「大学における韓国・朝鮮語と中国語の教学の現況について」  
岡山信男 (愛知大学客員教授)

#### 〈編集後記〉

人類が月に到達してから30年が経った。この快挙は驚きだったが、今やナノテクノロジーの時代が迫っている。人の遺伝子がすべて解読された。爪の大きさの面積にトランジスタが4億個も集積されたMPUが2004年には量産される、というニュースが続く。指先を見つめてどんな仕事みだろうと想像してみるが、ここはもう賞賛する以外にしようがない。

誰もがインターネットができるようになり、地球は小さくなって、情報リテラシーとともに語学の重要性はますます高まっている。もはや特に十分に英語を知らないでは生きられなくなっている。社会の要請は急である。入社条件にTOEICの最低点を設定し始めている。ある会社では社員全員に受験を強制し、その結果平均点は200点上昇、700点であると報じられた。

習得の方法も多様化している。衛星が地球の周りを飛び回る時代、空想で音を頼りにしていた方法からいまやVISUALをたよりに頼りどこであろうと修得は可能である。CS、BS、地上放送と、やる気がありさえすれば、独学で何か国語も学び取ることは容易である。

そうした放送の中から、今回、英語担当の先生方がおすすめ番組を解説付きでご紹介してくださった。楽しみながら上達すること請け合いだ。早速試してみてもはどうだろう。鉄は熱いうちに、頭は若いうちに!

(S.K.)